



新たな学びの生態系：人間とAIが共生する時代の高校教育

麗澤大学 中園 長新

AIを「脅威」や「万能の道具」としてではなく、「共に学ぶ仲間」として再定義する次世代の教育パラダイム。

「臭いものに蓋」が通用しない現実

学研教育総合研究所（2025年11月調査）による対話型生成AI利用率



AIによる自動生成です
内容未確認のため
間違いが含まれます

小学生: 36.6%

中学生: 43.2%

高校生: 73.7%

Key Insight: 生成AIはすでに子どもたちのデジタル生活に深く浸透している。教育機関がAIを排除しようとしても、大人の目の届かないところで利用され続ける。排除ではなく、適切な関係性の構築が急務である。

教育現場を引き裂くジレンマ



AIによる自動生成です
内容未確認のため
間違いが含まれます

推進・統合 **排除・懸念**

東京都の「都立AI」導入（2025年）のような
全校規模での先進的な公式活用。

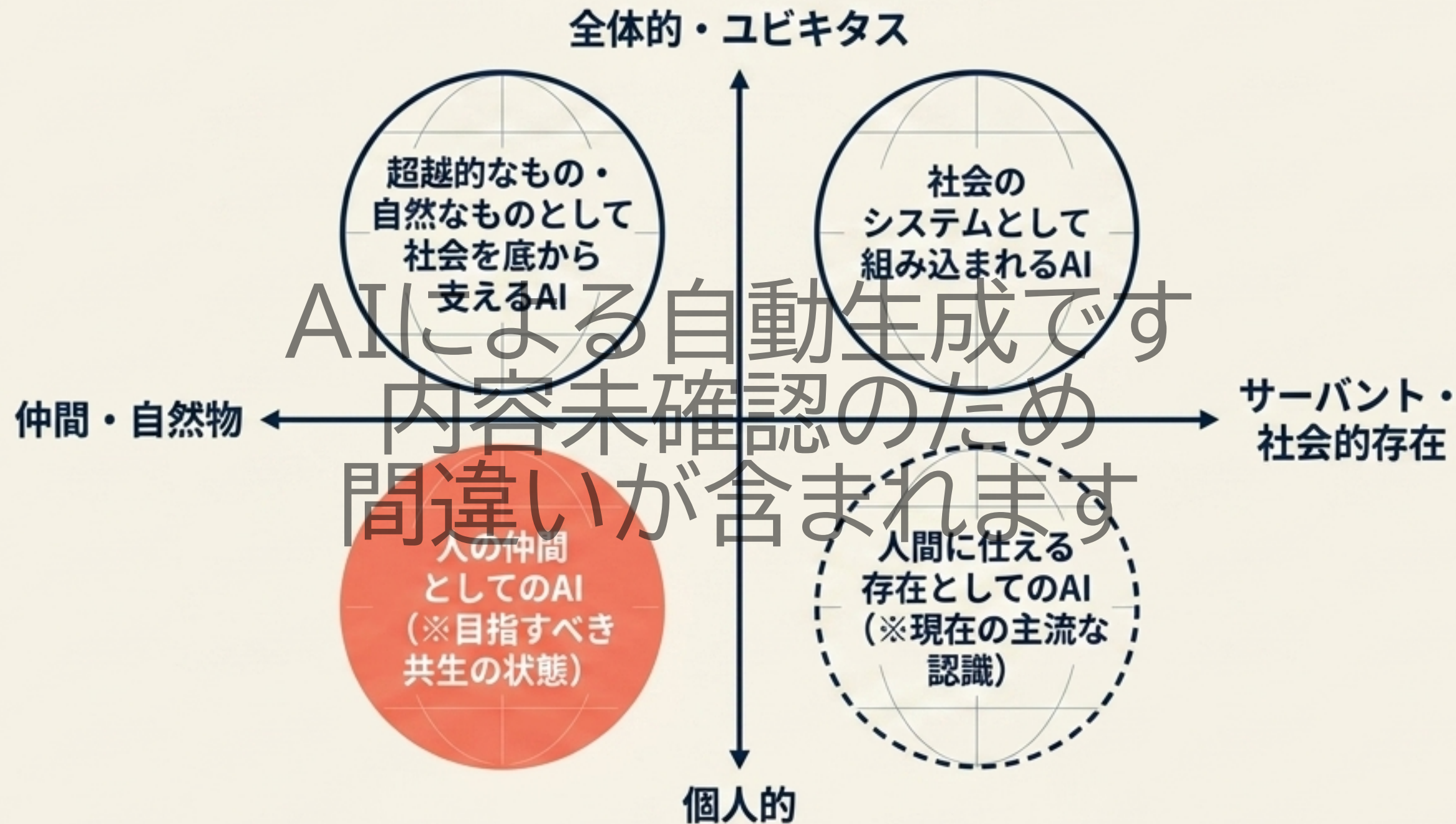
情報へのアクセスや学習効率の
飛躍的向上への期待。

レポート等の課題における生成AIの痕跡
（剽窃・思考力低下の懸念）。

文部科学省ガイドライン（2024）における「感性や独
創性を発揮させたい場面」での安易な利用への警鐘。

問われているのは「使うか、使わないか」ではなく、「どのような関係を築くか」である。

AI導入の4つのフェーズと「共生」の目的地



AIを単なる「便利な道具（サーバント）」として使役する関係から脱却し、対等な「仲間」として位置づけることが共生の第一歩である。

「共生」の社会的再定義

認識枠組みの更新



岡本・丹治 (2016) による共生 (Kyosei) の定義

発展途上の技術だからといってAIを下に見るのではなく、独立した存在として尊重し合う。
これまで共生の対象ではなかったAIを、社会のカテゴリに含めていくプロセスこそが「共生」である。

ハルシネーションのパラドックス：なぜ私たちはAIのミスを許せないのか？

現状の誤謬（AI = 万能の道具）

AIを絶対的で
完璧な教師・道
具と見なす

AIが
ハルシネーション
(嘘) を出力

裏切られたと感じ、
烈火のごとく怒
り排除する

人間の教師の間違いには寛容であるにもかかわらず、完璧を求めるためエラーを許容できない。

共生の視座（AI = 共に学ぶクラスメイト）

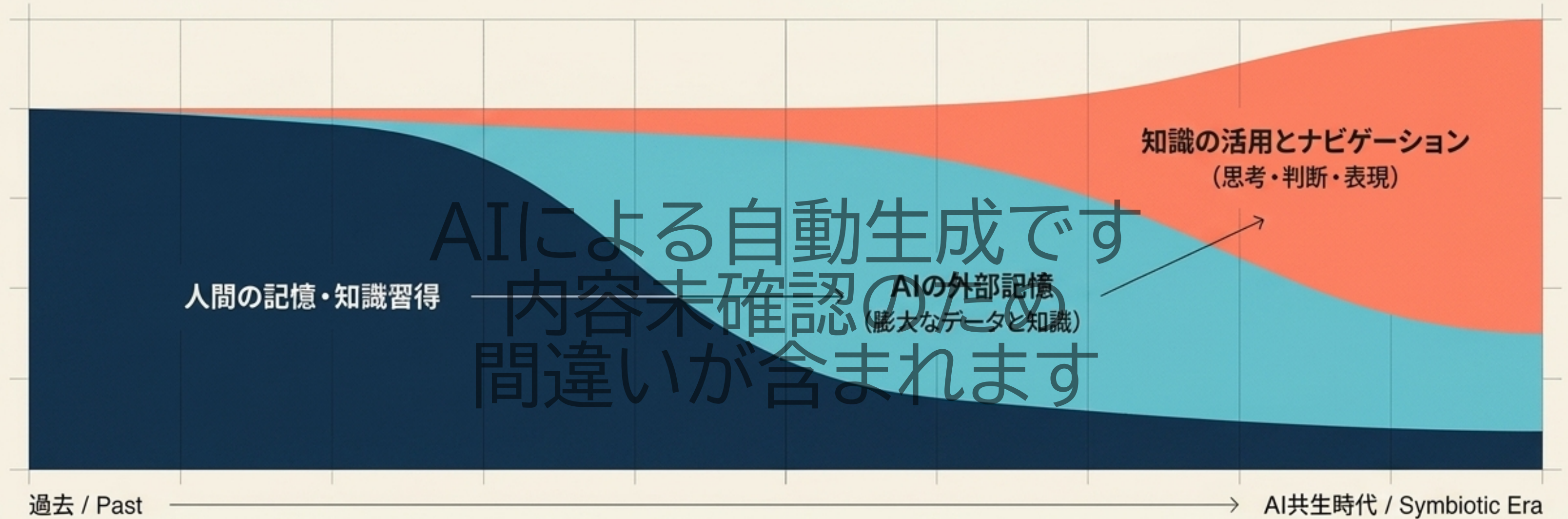
AIを不完全な学びの
伴走者と位置づける

AIがミスをする

自ら吟味・反芻し、共
より良い解を探求する

不完全な仲間であると認識すれば、回答を鵜呑みにせず、ミスは対話のきっかけとなる。

外部記憶としてのAIと、暗記型教育の終焉



ビッグデータを元にした膨大な知識を持つAIに対峙したとき、人間の記憶力は勝てない。「覚えるよりも調べたほうが早い」時代から、「AIに代わりにやってもらう」時代への移行。

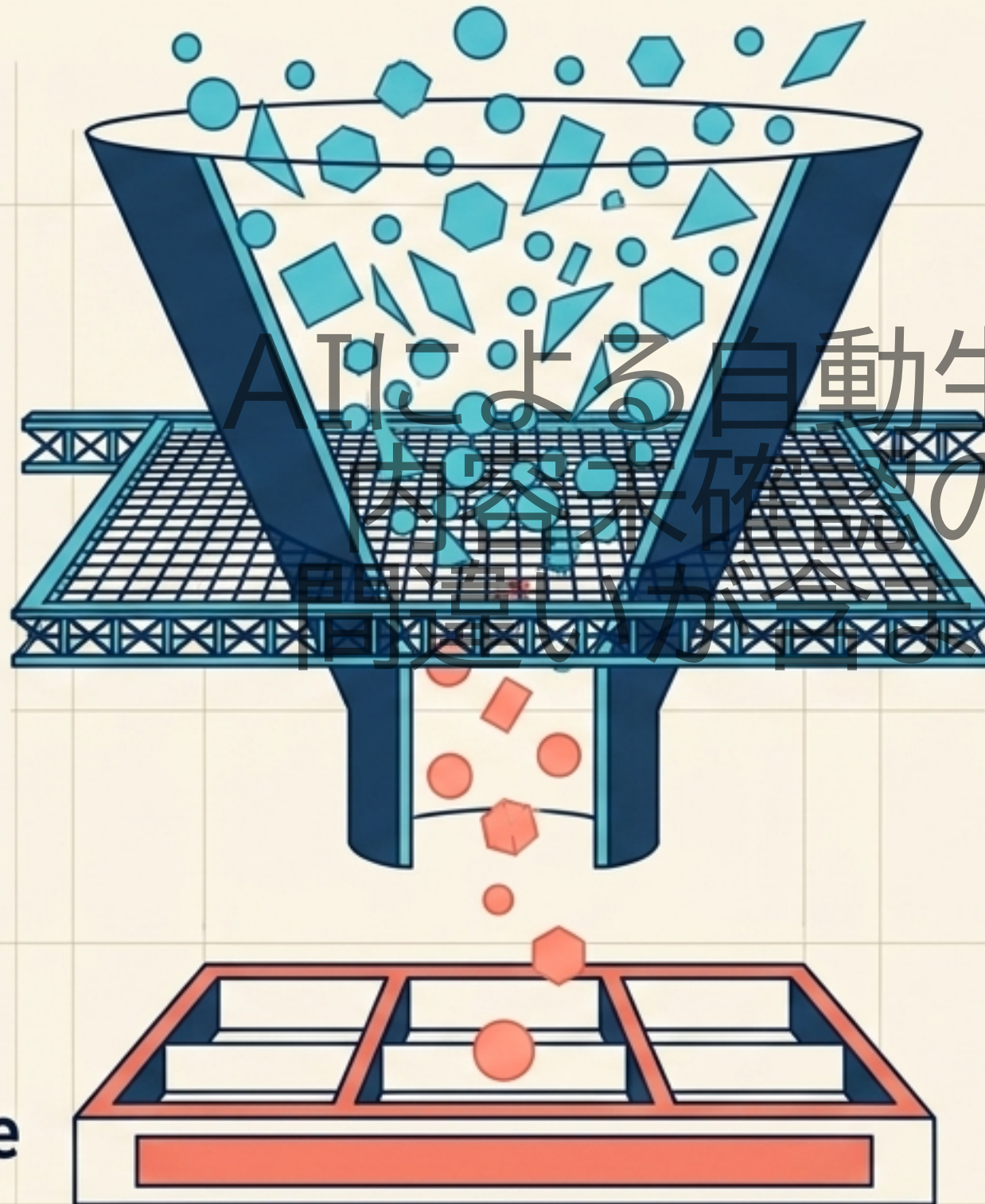
教科書の知識を覚え込む旧態依然とした学びは価値を失う。もはや知識の「習得」ではなく、知識をもとにした思考・判断・表現という「活用」に教育の重心を完全に移さなければならない。

必須となるフィルター：「AIリテラシー」

AIからの出力
(真実と嘘の混在)

人間の
AIリテラシー

真の知恵 /
True Knowledge



AIが台頭したからといって、
人間が学ばなくてよくなった
わけではない。
むしろ、これまで以上の知恵が
求められる。

AIによるハルシネーションを
見極めるリテラシーが必須。

「ある意味において、人間はAI
よりも賢くならないと、AIを活
用できない」(美馬, 2025)。

なぜ「高校教育」が共生の主戦場となるのか？



ネイティブ世代の到達

生成AIを使うことが「当たり前」になった生徒たちが多数派を占める段階である。

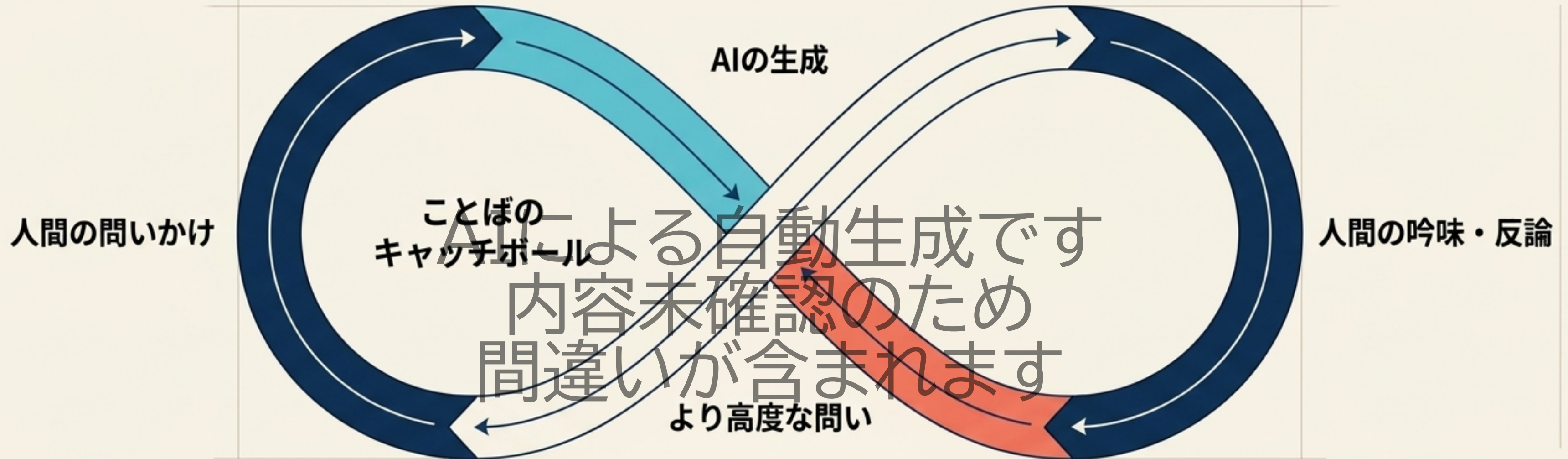
体系的な学習基盤

共通教科「情報科」を擁する高校は、AIの仕組みを体系的に学ぶ最適なインフラを持っている。

抽象的・倫理的思考の成熟度

発達段階において、ハルシネーションの構造や、AIに対する倫理的・法的課題を批判的に考察できる認知能力が備わる時期である。

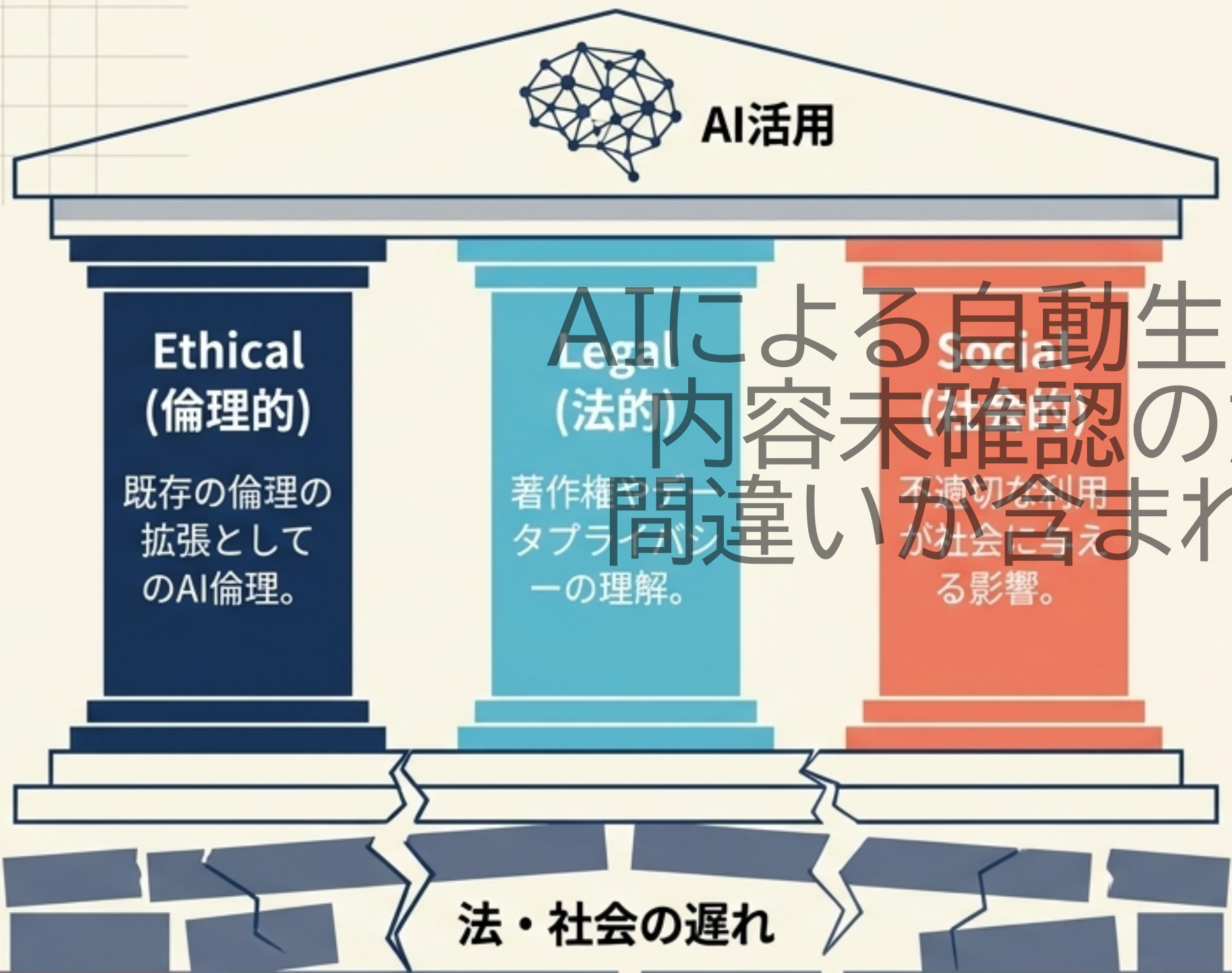
共生型学習の実践：生成AIとの「ディベート」



一問一答や検索的な使い方からの脱却。
(みんなのコード, 2023)

生成AIを議論の相手（ディベートパートナー）として活用する。**ことばのキャッチボール**を通じて、生徒自身の思考の解像度を上げ、回答を深めていく。AIは「答えを出す機械」ではなく、「**思考の壁打ち相手**」として機能する。

欠かせない柱：ELSI（倫理的・法的・社会的課題）教育



Context

先端技術の登場時、法整備や倫理観の醸成は常に遅れる。現在の生成物に対する著作権論争はその典型である。

Goal

単なる操作スキルの習得ではなく、ELSIの概念を学ぶことで、自ら主体的に、そして責任を持ってAIを活用できる市民を育成する。

学びのパラダイムシフト：3つの時代の比較

	従来型 (Pre-AI)	ツール型 (Current)	共生型 (Symbiotic Era)
AI観 (View of AI)	無関係・存在しない	万能のサーバント (便利な道具)	不完全だが有能なピア (共に学ぶ仲間)
人間の役割 (Human Role)	知識の蓄積者 (暗記)	業務の丸投げ・消費	知識の吟味者・ 対話の主導者
エラーへの対応 (Handling Errors)	減点対象	怒り・AIの排除	リテラシーを発揮し、 共に修正する機会

AIによる自動生成です
内容未確認のため
間違いが含まれます

ステレオタイプを超えて：未知の生態系を創る



AIによる自動生成です
内容未確認のため
間違いが含まれます



「人間とAIの共生」と聞いて、教室の机にロボットが座っている風景（解像度の低い理想）を想像してはならない。

共に生きることは、何でも同じように振る舞うことではない。人間とAIの「学び」の形が異なっている、それを認め合えることこそが真の共生である。

次の10年の教育のあり方は、AIに答えを聞くのではなく、
私たちがAIと共に創りあげていくものである。